

民と民との法を極める「自分見つけ」の旅

法曹界・金融界を中心に1980年から続く600名の人脈。ゼミOB会で担当者の2010年度福澤賞受賞を祝う。
ハードな学習から楽しい課外活動まで、詳細は手作りHP (<http://www.clb.mita.keio.ac.jp/law/ikedai/>) へどうぞ！

いけだまさお
池田眞朗
法学部・法務研究科教授

「池田ゼミ生に会いたければ図書館のグループ学習室に行けばいい」といわれるが、ゼミ生は遊びもスポーツも怠らない。私の研究会は、民法の財産法を学ぶ。1980年の開設以来、海外赴任等の間も教え子の教員が代講し、32年間空白なく継続している稀有なゼミである。卒業生は約600名に上り、最近では約半数が法曹界に進み、約半数が民間その他に就職する。卒業生の就職人数別ベスト3は、東京海上日動、三菱東京UFJ銀行、日本銀行である。私が民法の債権法を専門とし、法科大学院では金融法も担当している関係で、内外の金融機関や企業の法務部への就職が目立つが、アナウンサー、コピーライター等、進路は多彩である。官公庁も、経済産業省、金融庁、外務省等々に進んでいる。慶應義塾で教鞭をとる教授も4名いる。もともと、池田ゼミに入るには、1万字の入ゼミ論文と面接が課される。入ゼミ後も、隔週で400

0字のレポートが課され、3年生の夏合宿後は、また1万字の論文提出が求められる。秋には、親友である早稲田大学鎌田薫総長のゼミとの早慶合同ゼミがもう25年も続いており、毎年、東京大学や京都大学の先生方を出題講評者に招く。ゼミではディベート力の鍛錬のため全員に発言が求められ、プレゼンの練習としての個別報告コンクールもある。

こう書くと、大変「えぐい」ゼミと思われそうだが、学生たちは本心に仲が良く、OBの裁判官が地方の裁判所見学を企画してくれば、ついでに温泉旅行をしてきたり、卒業旅行もグループで楽しそうに企画している。

池田ゼミの最大の目標は、2年間の共同学習を通じての自己発見。これからの人生をどう生きるのかを見つけるためのゼミなのである。だから夢や目標のない人はお断り。進路面接も全員に複数回行う。卒業生諸君も、毎回のように入ゼミの口癖である。



自己発見一学問と、人生と一

きむられいも
木村怜萌 法学部4年

本研究会は民法の中でも財産法を中心に、事例問題の研究・討論等を行っています。知識や暗記偏重の学習ではなく、自ら問題を発見し解決することを目指し、ゼミ生同士の共同学習はほぼ毎日行っています。活動の詳細はホームページをご覧ください。

また、学問だけでなく人生にも向き合うのが池田ゼミ流。債権譲渡研究で福澤賞を受けた池田先生は、多忙な中でもゼミ生の人生相談に親身に応じてくださいます。私たちがゼミ生として以上に、一人の人間としてご指導くださるのです。だからこそ課されるハードルは一人ひとり異なります。私たちの性格や目指すものの違いを見極めてのアドバイスは、先生ご自身が受けた経験からとのこと。学問と、人生と、共にご指導くださる池田先生のもと、ゼミ生それぞれが、自分だけの道を見つけ歩んでいく、それが池田ゼミです。

自らの力で判断できる信頼される人間像を目指して

2000年に開講した経営学（経営情報論）の研究会。
学問的な能力と社会性の向上を目指して。

人間力構築のための「学び」

わたなべゆうすけ

渡邊勇介 商学部4年

「学ぶ」ということはどういうことなのか。私が神戸研究会に入って一番考えさせられたことです。最初のゼミの授業の時、「ゼミを普通の授業と同じだととらえるならゼミ活動なんて意味がない」と先生に言われたことを今でも覚えています。ゼミの具体的な内容は、半期ごとの経営学をテーマとしたグループ発表、特定の業界に注目し分析を行う業界分析や自分たちでテーマを決め経営学を研究する三田祭論文発表などが主です。基本的にグループワークで、みんなで知識を共有し合い、一つのことをやり遂げるとというのが神戸研究会の特徴です。集団で真剣に学業に取り組むことはゼミでなければ経験できない「学び」だと思います。経営学はもちろんのこと、社会に出て通用する人間力を身につけるために日々のゼミ活動に励んでいます。



かんべかずお
神戸和雄
商学部准教授

私の専門は経営情報論です。企業経営において情報技術がどのように活かされるべきか、また情報を活用するにあたって、より有用な意思決定プロセスがどのようなものであるかを研究対象としています。研究会では、私の専門分野は情報技術に関する手ほどきをするという形で活かし、学生には社会に出てから一般的に通じる経営学を理解してもらうことを考えています。

研究会の活動を通じて、私が学生諸君に習得して欲しいことは3つあります。1つ目は自ら判断する力を養うことです。2つ目は組織との調和をとりながら個々の能力を発揮し、組織全体の能力を高めるような人と協調できる人材になつてもらうことです。また協調の基本として3つ目の課題があります。それは信頼関係を構築できる人間であることです。これらは学生諸君が実際に社会に出たときに、企業や社会が望んでいる能力とし

て身につけてもらいたいと考えているからです。特に信頼と協調は人との交わりの中で習得すべきものであり、研究会活動は社会的経験の少ない彼らにとつては非常に重要な機会であると考え、私自身も研究会の一員としてさまざまな場面に参加するよう心がけています。

このような問題意識の中、研究会活動はグループ学習を中心に行っています。テーマをさまざまに変え、そのテーマごとに学生全員をできるだけ違うメンバーでグループ化し考察を深めることを繰り返すことで異質な人との付き合いができるよう企図しています。また時にはテーマ自体を探す、いわゆる問題発見能力を試すこともしてもらっています。

研究会で養った自ら判断する能力に加え信頼と協調の姿勢を身につけた彼らが、卒業後、豊かな人生を歩んでいる姿を思い描きながら研究会活動に励んでいます。

生命の「活き活き」とした挙動を化学する

バイオリズムのような活き活きとした生命現象が発生するメカニズムを化学で解析し、その知見に基づいて新しい産業技術を開発します（大学院生8名、学部生4名）。

あさくらこういち
朝倉浩一
理工学部教授

身の回りには、一見易しそうで実は難しいことが多々あります。

例えば「平らな表面を作製する」なんて誰でも簡単にできそうですが、棚やドアの塗装面を横から目をこらして見ると、数mm周期の凹凸構造が観察できます。これはオレンジピール（ゆず肌）と呼ばれ、塗装面の乾燥過程で自発的に発生する構造です。また、アルミサッシを近くで見ると約0.1mm周期のストライプ模様が観察できます。これは、アルミ加工の際に自発的に発生する構造です。

これらの構造発生は、高級車の塗装、DVDやBlu-ray Discの生産、フォトレジストの塗工などにおいて大きな問題となりますが、それを防ぐための技術開発のヒントとなるのが、意外にも、生命体に発生するバイオリズムです。バイオリズムには、心拍や睡眠―覚醒のような時間周期構造と、トラヤ熱帯魚の体表模様のような空間周期構造があり、これら「活き活き」

とした現象は、決して「生命は神が創り賜うた特別なもの」であるから発生するものではありません。

1977年のノーベル化学賞の対象となった「散逸構造」という概念に基づく、バイオリズム発生メカニズムを説明でき、化学反応によって時空間リズムを創り出せます。そして、生産プロセスにおいて問題となる構造発生も抑制できるようにします。

私たちの研究室では、「生命の不思議」を不思議のまま放置せず、その謎を化学で解き明かし、得られた知見に基づき新しい産業技術を開発しています。また、その研究を通して学生たちが「散逸構造」の概念を学び、研究者、技術者として社会へ巣立っていきます。なお、卒業生たちの研究室との付き合いは、共同研究、技術情報の交換、リクルート活動などを通じて一生続きます。この交流は、塾員、塾生、教員が学び教え合う「半学半教」精神の具現化と言えます。

HP : <http://www.apple.keio.ac.jp/~asakura/>
YouTube : <http://www.youtube.com/user/keiouniversity#p/c/11/2mjiRnsbq>

キーワードは「自己組織化」

たかやましゆんすけ

高山駿介 理工学研究科修士課程 1年

朝倉研究室では、「自己組織化」という現象を軸に、さまざまなテーマでの研究が行われています。研究室の名前は「有機」物質化学研究室ですが、有機化学だけでなく、サンスクリーン剤（日焼け止め）の性能評価を研究テーマとする人もいれば、化学反応速度の解析をテーマとする人もいます。このため、毎週行われる「週例」や年4回行われる中間発表会では、自分の研究テーマだけでなく他のさまざまなテーマに関する見識を得ることができます。また、勉強会や輪講では、英語で書かれた教科書を読み、すべてのテーマの基礎になる概念について学びます。教授から直接教えていただくだけでなく、学生同士でも教え合うことで、互いに高めあい、研究を進めています。



赤ちゃんから大人までこころの問題を考える

家族との関係の中で赤ちゃんの「こころ」がどのようにはぐくまれるかを学び、
赤ちゃんから大人に至るまでの現代のさまざまなこころの問題を考える。

世代を超えたメンタルヘルス

やなぎ だ まい
柳田 舞 環境情報学部4年

濱田庸子先生のメンタルヘルスのゼミは、個人で自由な研究をしています。毎週行う経過発表では「幸福論」「強迫性障害」等といったさまざまなテーマが取り上げられて、毎回新しい発見があります。特にテーマに縛られることもなく、先生や学生同士のやりとりを通して独自の研究を創り上げていきます。

濱田先生と森さち子先生の合同研究会では、乳幼児の発達論の研究を家庭訪問という方法に沿って進めています。毎週授業では赤ちゃんの成長過程をビデオ映像を通して分析しています。この時に先生方は必要に応じてアドバイスをくださいますが、主に学生が壇上に立ち授業を進めていきます。訪問で実際に目で見るのは、乳幼児の成長を見る上でとても貴重な体験です。親子関係もさまざまで、学生同士でも意見が違ったりするのも面白く、この研究会の魅力です。



はま だ ようこ
濱田庸子
環境情報学部教授

私は精神医学の研修と並行して、故小此木啓吾先生のもとで精神分析的療法を勉強しました。そして長男を出産する前に、小此木先生から勧められて勉強を始めた乳幼児精神保健の研究が、今の中心テーマになっています。濱田研究室は、子どもの精神発達とメンタルヘルスの二つの研究会を行っています。

子どもの精神発達の研究会は、2009年度から森さち子先生も加わって、精神分析的発達理論に基づき、家庭訪問による母子関係の観察とその報告、および討論を行っています。学生2、3人がグループを作り、一つの家庭を継続的に訪問しています。研究会全体では7、8家族の報告を聞くことができ、発達の普遍性と同時にそれぞれの母子のユニークさを知ることができます。赤ちゃんが非言語的な情緒交流から次第に言葉を話せるようになっていくプロセスを実際に観察する体験は、教科書で

「文字」を通して学ぶだけではわからないことを、たくさん教えてくれます。この体験は、人間関係の理解に幅広く役立ちます。

もう一つのメンタルヘルスの研究会では、大学生に見られるメンタルヘルスの問題について、各自がテーマを決めて勉強し、プレゼンをしています。私は特に自分自身の中で問題意識を高めテーマを設定するプロセスが重要と考えています。大学生は心理社会的モラトリウムにいる年代です。時には自分自身の未解決な課題に直面し苦しむこともあります。研究会内で仲間との議論などを通して少しずつ乗り越え、さらにはそれを職業選択につなげることもあります。研究会はそのような「場」を提供できるように心がけています。

会社員、公務員、消防士、写真家、中学の先生など卒業生の進路はさまざまで、臨床心理士になってSF C心身ウェルネスセンターで学生相談のカウンセラーを務めているOBもいます。